

政治的機会構造と文化的フレーミングの統合モデルをめざして

——戦後日本の住民運動の盛衰と抗議レパトリーを事例として——

成	元	哲	(中京大学社会学部)
中	澤	秀	雄 (札幌学院大学社会情報学部)
角	一	典	(北海道教育大学教育学部)
水	澤	弘	光 (新潟県頸城村総務課)
樋	口	直	人 (徳島大学総合科学部)

1 問題の所在と理論的課題

2度の安保闘争、住民運動の高揚と広がり、学生運動の停滞とラディカル化といった戦後日本の社会運動の盛衰と軌跡を、現時点でどのように分析し、今後のための教訓を引き出すことができるだろうか。

本稿で検討する住民運動は、80年代の「停滞・変容」ともいわれる時期を経てから、90年代になって直接民主主義との関連もあって、新たに脚光を浴びるようになった¹。しかし、今日の運動とそれ以前の運動との連続／断絶の位相、あるいは90年代的な運動に至る軌跡について、歴史的に比較検討する研究はほとんどみられない。今日の各種のNGO・NPO、ボランティアなどさまざまな運動を理解し、今後の展望を引き出すうえで、戦後日本の半世紀を俯瞰する研究の構想が求められている。そして、戦後日本の運動の意味を現時点から捉え直すには、個別の運動を越えたマクロな動態を把握し、その時代の運動を丸ごと分析の対象とし得る研究手法が必要になる。

では、住民運動のマクロ動態とは何か。もっとも包括的にいえば、それは戦後日本の住民運動と政策イノベーション及び制度変革とのダイナミズムを捉えることである。もちろん、こうした問題関心や研究の必要性は今になって初めて指摘されるものではない。たとえば、宮本憲一(1996)は次のように指摘している(下線は引用者)。

日本の経験をふりかえってみると、環境政策はつねに後手にまわってきた
といてよい。……このように政府の失敗を是正したのは、住民の公害反
対の世論をバックにした革新自治体の公害行政と公害裁判であった。……
こうして、70年代には深刻な公害事件は解決をみるようになった。その原
動力は住民の公害反対の世論と運動である。そして、それらが独創的な方
法で、一方で自治体を改革し、他方で公害裁判をすすめることによって、
政府の方針をかえさせたのである。しかし、環境関係の法や制度はゴムま
りの皮のようなもので、住民の世論や運動という空気がはいていなければ、
いつでもペシャンコになってしまう。1970年代末に革新自治体が退潮
し、また公害裁判が行政に対して独自性をもたなくなると、環境政策の後
退がはじまった（1996：42－44）。

このように住民運動の波と環境政策の前進／後退または革新自治体の盛衰
との相互関連性は従来から指摘されてきたし、またその検証は社会運動研究
者に課された大きな課題であった。しかし、こうした研究課題に社会運動研
究者が応えてきたとは言い難い。その原因の1つとして、住民運動と政策・
制度変革との相互作用を適切に分析するための、一貫した理論枠組みや方法
論が整備されていなかったことがあげられるだろう。

では、戦後の住民運動と政策・制度変革との相互作用に関するマクロ動態
を把握するためには、どのような研究手順が必要なのか。まず、異議申し立
て者としての地域住民を取り巻くマクロな社会・政治・経済的諸条件と住民
運動の盛衰との相互作用を十分捉え得る、一貫した理論枠組みの開発や実証
研究のための概念的操作化が必須であろう。また、こうした理論枠組みや理
論の検証に加えて、個別のケーススタディでは捉えきれない全体の動きを把
握するための方法論の整備も必要である。こうした問題意識に基づいた方法
論や実証研究については別稿に譲ることにして、本稿では、戦後の住民運動
のマクロ動態を把握するための分析枠組みを整備することにしたい²。

それでは、戦後の住民運動と政策・制度変革との相互作用に関するマクロ
動態を把握するためには、どのような分析視座が有効であろうか。まず、マ

クロな社会・政治・経済的諸条件を特定し、それとの関連において住民のさまざまな活動の盛衰と拡がり进行分析し得るパースペクティブが必要である。そこで我々が採用したのは、マクロの社会的・政治的・経済的な諸条件の変化を、異議申し立て者としての地域住民(「挑戦者」)からみた「機会／制約の歴史的推移」として捉える視点である。こうした分析視座は、地域開発政策によって生活及び生産活動上の問題に直面し、政治的な要求提出や異議申し立てを行う集団にとって、どのような政治的機会及び回路が用意されてきたのか、また住民運動が既存の諸機会の配置をいかに変化させてきたのかを、戦後という長期的な視点で比較検討することを可能にする。

以下、第2節では、挑戦者にとって機会／制約の構造を分析する欧米の社会運動の「政治過程アプローチ」を中心にレビューを行う。これを踏まえて第3節では、住民運動のマクロ動態を把握するための理論枠組み、すなわち、政治的機会構造と文化的フレーミングの統合モデルを整備する。そして、第4節では、この統合モデルを戦後の住民運動の抗議形態や運動の盛衰に試論的に適用し、応用の可能性を検討する。第5節では、今後の実証研究のための理論的課題を明らかにしたい。

2 政治的機会構造とフレーム調整

2. 1 社会運動の「政治過程アプローチ」の理論的検討

これまでの社会学における住民運動研究は、運動組織やその内部過程に注目するあまり(町村1989:48)、運動と政策決定過程を含むマクロな政治環境との関係のダイミズムに関する分析をやや欠くきらいがあった。これに対し政治学の着眼点は、中央政治における政策の決定・執行過程に関する政治過程に偏りがちであり、政治過程と社会過程との媒介領域を十分捉えてこなかった(町村1994:112, 辻中1988:8-9)。本稿は、こうした事態に対するオルタナティブの1つとして、次の2点を基本的な前提として議論を進めたい。(1)住民運動はマクロな政治環境との関係において理解されるべき、優れて政治的な現象である。(2)運動の生成・発展・衰退の一連のライフサイク

ルや運動セクターの盛衰は、政治的な諸条件の関数として理解されるべきである³。

こうした運動と政治環境との関係に関する研究は、近年欧米の「政治過程アプローチ」におけるフロンティアの1つとなっており、多くの優れた研究成果をあげている。社会運動の「政治過程アプローチ」は、古く1970年代初期から Lipsky (1968, 1970) や Eisinger (1973) らによって、都市政治と抗議運動との関係を分析するために用いられてきた。その後、アメリカの農場労働者に関する研究、公民権運動の分析、ヨーロッパの国家建設過程や労働政治の分析などに広く利用されるようになった。

そして近年では、通常の制度政治とは区別される「争議の政治」、「運動政治」、「抗議の政治」として、独立した研究領域を形成している (McAdam, Tarrow and Tilly 2001)。そこでは、社会運動と政治システムとの関係に焦点を当てた国家間の運動比較や一国の運動インダストリー間の比較分析が盛んに行われるようになった (Tarrow 1996 b)。これらの研究は、政治体の公開性の程度、選挙同盟の安定度、エリートや他の支持者の有無といった政治的・制度的機会や資源が、運動の生成や成功にとって決定的な重要性を持つことを強調する。

社会運動研究における「政治過程アプローチ」とは、「既存の資源動員論や新しい社会運動論が無視してきた側面、すなわち、政治と社会運動の関連性に注目し、政治構造が運動に及ぼすインパクトを強調する分析方法」を指す (Tarrow 1998)。こうしたアプローチの登場の背景には、新しい社会運動論によるマクロの一般化や資源動員論によるミクロの経験主義を避けるねらいがあり、それは“Bringing the *State* Back In” (Evans, Rueschemeyer and Skocpol 1985) が近年アメリカ政治社会学の合言葉となっていることから推察できる⁴。

政治過程アプローチの視点をやや図式的に示すと、以下のようになるだろう。「政治的機会は社会運動の生成・発展にとって不可欠のものであり、こうした機会は主に国家機構、政治エリートの配置やその凝集性、政党の構造・イデオロギー・構成によって構造化される。こうした意味で、国家は社会

運動の生成や発展を形づくる紛争及び同盟のシステムを形成する。それと同時に、社会運動は政治変動のエージェントである。運動はこうした機会に応じて活動し、またその活動が今度は新しい機会を生成するのに貢献する。国家と社会運動に関する議論は、こうした関係の両サイドに焦点を当てなければならない」(Jenkins and Klandermans 1995 : 4)。

近年の政治過程アプローチは、資源動員論が資源や専門組織を一方的に強調することへの反発として登場し、社会運動の動員における政治構造や制度の重要性を強調する。とりわけ、国家や政治構造が、社会運動の戦略、軌跡やあり得るインパクトを形成することに注目する(Joppke 1993)。すなわち、資源動員論が軽視してきた「運動を取り巻く外部環境のインパクト」が中心的な研究課題となっている。特に、このアプローチは社会運動の盛衰や特定の運動の成功の条件として、「政治的機会構造」に焦点を当てる(Tarrow 1989 a)。たとえば、Eisinger (1973) は政治体の開放性、Piven and Cloward (1977) は選挙同盟の不安定性、Della Porta and Rucht (1995) は左右両政党に、Jenkins and Perrow (1977) や Gamson (1990) は政治システム内部の支持グループや運動に好意的なエリートの存在に注目する⁵。

こうした研究のなかでももっとも包括的な政治過程論は、Tilly (1978) によって開発されたといつてよい⁶。Tilly は集合行為のレパートリーを、その背景にある政治的近代化や国家建設過程などの巨大で長期的な構造変動と関連づけて検討する。こうした Tilly の体系的研究を発展的に継承しているのが、公民権運動を分析した McAdam (1982) や、農場労働者の運動を分析した Jenkins (1985) である。この2つの分析は、社会運動における集合的動員や非制度的な行為の役割を強調するとともに、運動の成長・成功のためには政治的及び制度的機会が重要であることを強調する点で共通している。

Tarrow によると、政治過程アプローチの理論的な支柱ともいえる「政治的機会構造」とは、成功や失敗に関する人々の期待に影響を及ぼすことによって、人々が集合行為に着手するための誘因を提供する政治環境の一貫した(必ずしもフォーマルないし恒常的なものではないが)次元を指す」(1994 : 85)。政治的機会という概念のメリットは、「なぜ運動が当局やエリートに対

する急激な、しかし一時的な影響力(leverage)を獲得し、そして運動による優れた努力にもかかわらず、それを失ってしまうのかを理解するうえで有効であり、また、動員が深い不満や強力な資源を持つ人々から、全く異なった状況におかれた人々に、いかに伝播するのかを説明する時にも役立つ」(Tarrow 1994 : 85-6)。

従来、「政治的機会構造」という概念は、主に集合行為のタイミング（いつ運動が生成・発展するのか、またいついかなる条件の下で衰退するのか）、運動の組織戦略⁷（制度的戦略か非制度的戦略か）や運動の帰結（政策や政治システムへのインパクトの程度）を、その説明対象としてきた(McAdam 1996a)。しかし、今までのところ、政治的機会構造は、エリートの支持、他のグループとの連合形成、国家構造、レジーム変動などのように、多様な諸変数を列挙するにとどまり、分析概念としての体系性や明確性といった点では彫琢の余地を残している(Tarrow 1988 : 430, 1996 : 880-81)。事実、多くの運動研究において、運動活動を促進／制約するすべての環境要因が政治的機会として概念化されるきらいがある(Gamson and Meyer 1996 : 275)。このように政治的機会という用語の概念的混乱を避けるためには、何が説明の対象であるか、その説明に密接に関わるのは、どのような次元の政治的機会であるかを明らかにしなければならない。

2. 2 政治的機会構造の諸次元

(1) 政治的機会の構造的側面と流動的側面

もともと政治的機会という概念は、抗議活動の盛衰のタイミングをより広い政治システムの変動の関数として捉えるために提起されたものであった。したがって、政治的機会構造研究では以下の2つの考え方が共有されている。(1)変動中の制度的構造や政権側のイデオロギー的傾向によって許容される諸機会が運動のタイミングと運命を左右する。(2)その結果として、政治状況によって社会運動の戦略・戦術及び政策効果が異なる。これらの研究を整理すると、次の2つの軸に沿った4つの方向で進められてきたといえる。

まず縦軸から見てみよう。一方は、異なる国や地域の同一運動の戦略・戦

術や政策効果における相違を説明するために、それぞれの国の政治的機会におけるヴァリエーションに着目する。主にヨーロッパの国民国家間の比較研究がこれに該当する(Kitschelt 1986, Kriesi et al. 1992, 1995)⁸。たとえば、Kitschelt (1986) は欧州 4 ケ国の反原発運動を比較研究するなかで、運動の戦略やインパクトにおける相違は、政治体制のスタイルにおける相違に起因するという。彼がいう政治体制のスタイルは、特定の資源の布置連関、制度的配置や社会的動員の歴史的経験を意味するものとして、特定の歴史的瞬間において抗議運動の生成・発展を促進し、それ以外の時には運動を抑圧するものである。具体的に Kitschelt が比較の対象としているのは、挑戦者に対する政治システムの開放性と、そのシステムによる政策実行能力である。しかし、そこでは政治体制が政策、政府、社会的同盟における短期的変動とは独立した変化しにくい国家構造であるとされているため、説明対象ではなく所与の条件として扱われる。こうした視点から、国家構造の相違が運動戦略に及ぼす影響や、その運動戦略がそれぞれの国におけるエネルギー政策に及ぼすインパクトの有効性が比較される。

このような Kitschelt の構造的アプローチは、政治的機会の中で相対的に安定的な側面の役割を強調するが、Rucht (1990) や Cooper (1996) が指摘するように、政治的機会の恒常的な要因は動員のダイナミックなプロセスを理解する際にはあまり有効ではない。そこでもう一方は、所与の国家における運動間の比較や特定の運動の盛衰・軌跡を分析するために、時間とともに変動する政治的機会の流動的(conjunctural)な側面を検討するものである。前者が、運動が政治システムに及ぼす影響や運動の戦略決定において、構造的要素が持つ重要性を強調する。後者は、時間とともに変動する運動行為者の「権力資源」を形成する政治的・社会的・経済的過程からなる政治的機会のダイナミックな要素に注目する(Cooper 1996: 15-7)。

たとえば Rucht (1990) は、同盟関係の変化、社会的統制や抑圧の水準、エリート統合の崩壊、公共政策の変化などの、相対的に変化しやすい側面に焦点を当てる⁹。また、Tarrow(1989 b)は、イタリアが成熟資本主義へと移行する過程で発生した、保守政治のヘゲモニーの終焉と社会党の政権入りとい

う状況に注目した。すなわち、そうした政治変動が政府のエリート内の亀裂を露呈し、なおかつ新しい連立政権が抗議を抑圧する意志を低減させたため、新しい政治的要求のための空間が開かれたという¹⁰。さらに Brockett (1991, 1993) は、中央アメリカ諸国における農民動員の比較で、①運動を支援する外部の同盟の有無、②反乱を抑圧する政権の能力、③エリートの分節化とその内部の紛争、④有意味なアクセス・ポイントの有無といった政治的機会の流動的な要素を検討している。さらに、Rucht や Koopmans (1995) は構造とエージェンシーとの間の相互作用、すなわち政治的機会と運動戦略との間の相互関係にもっと注目すべきだと主張している。

しかし、前者の構造的アプローチと、後者の流動的でダイナミックな側面を強調するアプローチは、必ずしも相容れないものではない。前者の構造的で相対的に安定的な政治的機会概念は、運動の空間的比較に有効であり、後者の流動的で変化しやすい政治的機会の要素は、運動の時間的比較に有効であるからである (Gamson and Meyer 1996, Cooper 1996)。たとえば、アメリカ核兵器凍結運動の盛衰に関する研究の中で、Meyer (1990) は安定的な側面として制度構造と政党システムに、変化しやすい側面としてエリート配置や公共政策の変化に、それぞれ分節化して分析を行っている。

(2) 文化的側面と制度的側面

次に横軸に沿って見ると、一方は政治的機会の文化的側面、つまり、運動のイデオロギー資源や運動活動のポテンシャルを増大させる文化的機会の拡大を強調する。そして他方は、上記で指摘した運動の盛衰や運動の成功に影響を及ぼす、制度的側面を強調するアプローチである。Gamson and Meyer (1996) は、機会は文化的要素を持っているため¹¹、政治制度と政治的行為者との間の関係のみに注目すると、重要な側面を見失うと主張する。

また Brand は、支配的な文化的風土における変化に注目し、1950年代の民営化と保守主義、60年代の改革主義や文化的な革命的ムード、70年代の景気後退や成長に対するエコロジー的限界の認識、80年代の新保守主義とポスト・モダンの時代精神を、それぞれの時代に突出した機会の文化的側面として

指摘している(1990:2)¹²。そして、McAdam (1994) は文化的機会を拡大させる要因に関する一般的な類型を、①突出した文化的価値と伝統的な社会的諸実践との間の歴然とした矛盾のドラマ化、②急激に与えられた不満、③システムの脆弱性または非正統性のドラマ化、④挑戦者が自らの不満や要求の見取り図を描きうる革新的なマスターフレームの有無、として同定している。しかし、Gamson and Meyer が政治的機会のフレーミングの重要性を強調するのに対して、McAdam は「彼らは重要な分析的区分を不明確にする」と批判する¹³。彼は「もっとも政治的な機会として擁護できる構造的変動や権力変化のような要因は、それらの変動が解釈されフレーミングされる集合的過程と混同されてはならない。この2つを分離して扱うのは、政治的機会の概念的正確さを保つためだけではなく、2つの興味深い現象を見分けるためである。すなわち、1つは集合行為にとって明らかに有利な政治的変動があるにも関わらず、集合行為を促す解釈が行われないケースで、もう1つは挑戦者集団の権力関係に大した変化がないにもかかわらず、集合行為が起こるケースである」(1996:26)。要するに、抗議運動を行うにあたって政治的機会だけでは不十分で、運動参加に関する個人及び集団の「認知的プロセス」¹⁴が必要であるということである¹⁵。政治的機会の文化的側面は、こうした認知的プロセスを支える背景としての意味を持つ。

こうした運動の文化的資源や政治的機会の文化的基礎として挙げられるのは、イデオロギー資源、フレーム及びフレーミング・プロセスや政治文化など多様である。が、これらは運動にとっての政治的チャンスや制度的構造は一定して変化しないが、運動行為が変化する場合を説明するという点で共通している(Swidler 1986:277)。ここでの政治的機会の文化的側面とは、政治的アリーナの客観的構造とは区別される。そして、政治的討論や社会闘争において特定の 이슈にフレームが与えられる仕方は、その国家や共同体の中で長年培われてきた政治的伝統や文化に依存するということを含意する(Joppke 1993:14)。

こうした文化的側面の中にも、相対的に恒常的で漸次的にしか変化しない構造的なものと、変化しやすいものがある。前者の代表が政治文化であり、

意識的，無意識的に人々の政治活動を規定し，政治制度の機能に重大な影響を与えうる。後者が特定のイシュー・サイクルであり，政治体，運動体，メディアなどによる相互作用により変化する。

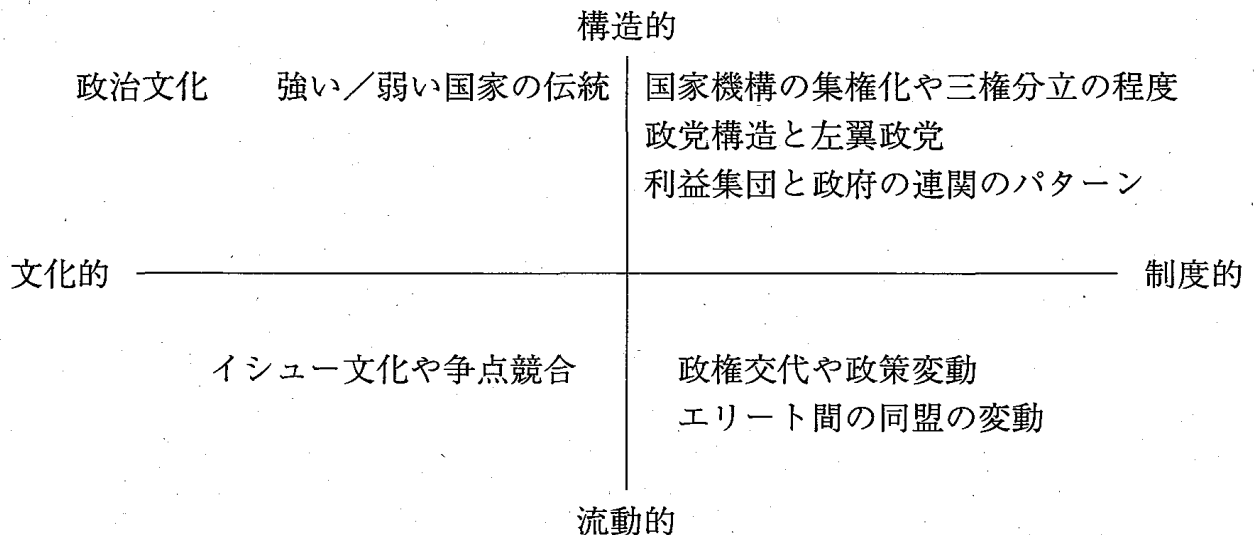


図1 政治的機会構造の諸次元(Gamson and Meyer 1996)

2. 3 フレーム調整

他方，フレームの概念は，ゴフマンのフレーム分析を運動分析に応用した概念である。個人や集団が事象や出来事を意味づけすることによって，経験を組織し行為を導くことを可能にする解釈図式を指す¹⁶。個人と社会運動組織，また運動組織間で，こうしたフレームを連結及び結合することが，フレーム調整である。このフレーム調整は4つの形態に分類できる。第1がフレーム架橋であり，ある争点や問題に関して，イデオロギー的には一致しているが構造的には関係ない複数のフレームを結合することをいう。第2がフレーム増幅であり，ある争点や問題に関係する解釈フレームを明確にし強化することである。第3に，フレーム拡張として，既存のフレームでは参加者が得られない場合に，潜在的参加者に合わせてフレームを拡張することである。第4がフレーム転換であり，通常的生活様式と運動組織が持っている価値とが合わない場合に，参加者を獲得するために新しい解釈フレームをつくることである(Snow et al.1986 : 468-74)¹⁷。

ところで，フレーム調整はどのように運動の動員力に結びつくのであろう

か。個人や集団の間のフレーム調整が具体的な運動の動員力に結びつく状況としては、大きく次の2つのケースを考えることができるだろう。第1は、ある問題状況に対し共通の不満や危機意識が形成されていないため、個人的ネットワークや組織による情報伝達を通じて、個人間及び集団間に共通のフレームを形成していかなければならない場合である。第2は、個人や集団が共通の不満や危機意識を持ってはいるが、その不満を表出し利害や目標を追求する制度的チャンネルや組織的基盤を持たない場合である。前者の場合は、特定の出来事や社会状況を、変化が必要なものとして診断する「診断的フレーミング」や、診断された問題の解決策を提示し、それに到達する道筋を示す「予言的フレーミング」が、相対的な有効性を持つ。一方、後者の場合は、問題状況や事態を改善するための行為に参加するように呼びかける「動機的フレーミング」が、とりわけ重要である(Snow and Benford 1988)。

フレーム調整が運動の動員のための戦略的行為であり、その調整過程は当の問題や出来事に対する集合的アイデンティティの形成過程である点は、とりわけ注目に値する。このようにフレーム調整過程は、支持者獲得のために、他のフレームとの競合を通じて、問題に対する意味づけを行うダイナミックな過程であるといえよう。さらに、フレーム概念はミクロな運動参加の分析にのみ用いられるわけではない。大きな運動の波である抗議サイクルの形成には、全体を通じた「マスターフレーム」が不可欠であり、政治的機会構造とマスターフレームはいわば相互作用的に変化していく。こうした点からも、政治的機会構造の文化的側面に対する分析が要請されることとなる(McAdam 1996 b, Snow and Benford 1992)¹⁸。

3 政治的機会構造と文化的フレーミングの統合モデル

3. 1 政治的機会構造 —— 記述概念か分析概念か

社会運動と制度政治との相互作用に関する研究をもっとも精力的に行ってきた Tarrow (1996 : 881) が指摘するとおり、政治的機会構造概念はともすれば社会運動と政治環境に関する事後的な包括概念化(catch-all term)の危険

がある¹⁹。社会運動の専門誌 *Mobilization* の編集者 Johnston(1997 : vi-vii)は、資源動員論がシンボルや言語などありとあらゆることを運動資源として概念化し、資源があるから運動が成功するというトートロジーに陥ると批判している。それと全く同様の現象が今日、政治的機会構造とフレーミング・プロセスという概念をめぐる起きていることを戒め、より正確な用語や概念の利用を促している。

このような政治的機会構造や文化的フレーミングという概念の使用上の混乱は、欧米の運動研究においてだけではなく、日本の運動論においても該当するだろう。概念のスポンジ化を避けるためには、社会運動の政治的機会と文化的フレーミング・プロセスを事後的な記述概念としてだけでなく、諸条件の間の関数としての分析概念として捉えるべきである。こうした認識に基づき、政治的機会構造と文化的フレーミングを分析概念として整備する試みとして、政治的機会構造とそれを形づくる文化的フレーミングを統合するモデルが必要であると考ええる。以下ではそのための理論的枠組みを整理する。

3. 2 政治的機会構造と文化的フレーミングの統合モデルの分析枠組み

第2節の見取り図は、政治的機会構造のさまざまな側面を理解するうえで示唆に富む。しかし、これは暫定的な整理にすぎず、実際の分析にはさらなる彫琢が必要である。政治的機会構造を構成する諸要素は、「構造」と呼べるほどの体系性や概念的一貫性を持たないし、これらの諸要素が実際の運動に影響を及ぼすメカニズムは明らかにされていないからである。

そのため以下では、Sewell (1992) の「構造」概念を手がかりに、政治的機会構造という概念を体系的に捉えるとともに、政治的機会構造が実際の運動を規定するメカニズムを明らかにするための操作的定義を行う。Sewell は、Giddens の「構造の二重性」や Bourdieu の「ハビトゥス」の概念を批判的に再構成し、「構造」をヴァーチャルな文化的スキームとアクチュアルな資源との、二重の特徴を持つものとして定義する。つまり、資源は文化的スキームを具現したものであり、同時に文化的スキームの意味付与や正当化も行う (1992 : 13)。こうした考え方によると、構造とは社会的行為を促進／制

約し、その行為によって再生産される、文化的スキームと資源のセットとの相即的なものとして構成される。また、構造は本質的にダイナミックなものであり、絶えず進化する社会的相互作用の結果であり、その過程のマトリックスである（1992：27）。

こうした Sewell（1992）の「構造」概念を整理すると、政治的機会構造は次のように定義できる。すなわち、政治的機会構造とは、社会的行為を促進／制約する政治制度（資源のセット）と政治文化（文化的スキーム）との相即的なものとして、行為者の間の持続的な相互作用によって生産・再生産されるものである。また、その政治的機会構造が実際の運動を規定するメカニズムを念頭において操作的に定式化すると、次のようになる。

POS＝政治的資源量（制度的アクセスの度合い）×文化的フレーミング（政治的機会を制御する解釈図式）

ただし、ここでの×の意味は、政治的資源量と文化的フレーミングが contingent な関係にあることをあらわしている。こうした定式化の理論的前提として以下の3つをあげておこう。第1に、異議申し立てを行う集団が政治過程で行為する仕方は、単に自分たちが持つ資源の関数であるのみならず、政治システムの開放度、有力な同盟者の有無といった政治的機会の関数でもある。抗議運動は、攪乱的な性質を持っており、政治過程において「相対的に権力のない人々」に政治的影響力や交渉手段を提供することを企図した集合的なマニフェステーションである。その意味で抗議とは、政治システムにおいて意思表示や要求提出を行う行為者が自らの持つ資源の影響力を最大にして、要求提出による費用を最小化しようとする費用便益計算の産物である。第2に、抗議運動の発生や成功／失敗は政治的機会構造の性質に規定されると同時に、逆に運動の発生や成功／失敗は政治的機会構造（政策的イノベーションや制度改革など）を変化させる。第3に、異議申し立て者にとって行為形態や運動戦略は、政治的機会構造に規定されるとともに、運動のインパクトや成果もそれぞれの政治的機会構造によって異なる。

3. 3 抗議レパートリーの定義と形態

ここで提示する統合モデルにおいて、政治的機会構造と運動の戦略的行為の交錯する地点に位置するのが抗議レパートリー概念である。抗議レパートリーという概念は、「人々は共通の利害に基づく行為のために、かなり限定され、また十分確立された一連の手段を利用する傾向があるという観察に基づいた概念」として、Tillyによって提起されたものである(Traugott 1995 a: 2, 1995 b: 43)。競合的、反作用的、作用的という、彼が挙げた集合行為の3つの形態は、レパートリー概念の原型といえる(Tilly 1978)。

Tillyのレパートリー概念の特徴として、集合行為の時系列上の連続性と、より長期にわたる抗議形態の根本的な変動との両方を強調することが挙げられよう²⁰。Tillyがレパートリー概念を本格的に展開しているのは『動員から革命へ』においてである(Tilly 1978)。その後の著作(Tilly 1986, 1993, 1995)では、フランスとイギリスにおける抗議レパートリーの長期的な変遷を扱っている。

彼によれば、イギリスでは18世紀から19世紀にかけて、抗議の性格やスタイルが劇的に変化し、19世紀には「ナショナルな社会運動」が支配的になる。これ以前の抗議は単一のコミュニティに限定され、集団の要求の標的である特定の状況または行為者に対抗するものであった。18世紀に支配的な紛争形態は、穀物収奪や食料暴動、関所の攻撃、祭りや儀式の妨害、禁止された領土での集団的な狩猟、土地への侵入、財産破壊、そして辱めを与えることであり、標的への直接の攻撃が支配的だった。19世紀には、こうした抗議のタイプはほとんど消え、より直接的ではない集合行為の形態、つまり、デモ、集会、公的集会などが現れた。これらはいくつかの地域を同時に巻き込み、剥奪された集団または排除された集団の名の下で、国家当局に挑戦するものであった(Tilly 1995: 32-38)。

一方で、Tarrow (1989b, 1994, 1995) は、集合行為の歴史をレパートリーの観点のみからみると、拡大された政治的機会構造が新しい戦術や挑戦者集団を数多く産出する、「狂気の瞬間」(moments of madness)を見失ってしまうと主張する。彼は、1965年から1974年までのイタリアにおける大衆動員や

抗議の時代に関する定式化に基づいて、抗議サイクルの研究を要請した(Tarrow 1995)。Tarrow の抗議サイクルの概念は、1960年代と70年代のアメリカにおける抗議活動の隆盛とその後の衰退に関心を持つ多くの学者に影響を及ぼしている(Taylor 1996)。Tarrow によると、Tilly の集合行為のレパートリーという概念は、特定の争議形態の歴史が後続の社会運動に与える影響を理解するには有効でないので、抗議サイクルとの関係において検討すべきであると主張する。

こうした点に加えて、共通の目標を達成するために、日常実践から形成されたルーチン化されたツールキット(Swidler 1986)である点において、レパートリー概念は他と区別される特質を持つ。つまりこの概念には、Stinchcombe が指摘するように、スキルという手段的特性と文化的形態という表出的特性が同時に含まれている(Tarrow 1995: 91)。またレパートリー概念は、構造的制約の中の主体による意図的選択の側面を持つため、制約された範囲内でなじみのあるレパートリーの中から行為者が選択することが強調される(Tilly 1979)。こうしたオプションは以前の経験と、利用可能な物質的、組織的、観念的資源の両方によって条件づけられる。

抗議レパートリーとは、ある集団が共通の利害に基づいてクレームを行う再利用可能な手段の全セットを意味し、それは攪乱性(disruptiveness)の度合いによって、通念的、敵対的、暴力的に分けられる(Tarrow 1989b, 1994, 1995)。Szabo (1996)によると、ポスト共産主義時代の民主主義において暴力的で攪乱的な抗議が発生することは、当該社会や集団のラディカルな抗議文化の指標であり、したがって、民主主義の統合には必ずしも貢献しない。他方、暴力的でなく攪乱性も低い、つまり制度化された抗議形態が優勢になった場合、中東欧諸国(ECE)の民主的統合を支持し、制度志向の改革主義的戦略の一部としてみなしう。このように抗議レパートリーの暴力／非暴力、攪乱／非攪乱の特徴や合法／非合法は、当該社会の政治的機会構造と相関関係がある。つまり、さまざまな抗議レパートリーは、政治的機会構造に規定されながら、同時に当該社会での異議申し立ての様式を変化させることによって、政治的機会構造を変化させるのである(McAdam, Tarrow and Tilly 1996: 24)。

3. 4 統合モデルと抗議レパートリーの戦略的有效性

以上の議論から、特定の政治的機会構造と抗議レパートリーに相関関係があることは明らかである。しかし、Tilly や Tarrow らは、抗議レパートリーと特定の政治的機会構造との相関を十分明らかにしていない。また、彼らは抗議レパートリー概念を、それ自体文化的構築物であり、言説やレトリックとしての側面を持ち合わせていることを指摘しながらも、体系的に概念化していない。それゆえ抗議レパートリーに関しては、実質的には政治的機会のうち制度的な側面との相関にしか言及されていない。

ここでは、政治的機会構造の布置連関に応じてどのような行為形態及び抗議戦略が有効であるかを検討したい。その際、集合行為の目標は、体制変革やシンボリックなパフォーマンスではなく、意思形成や政策決定への影響力の行使に限定する。

第1の軸は政治的機会構造の一側面である資源の量、すなわち、制度的アクセスの度合いに応じて、「通念的な」抗議レパートリーと既存の規範や秩序から逸脱した「対決的な」抗議レパートリーが対極をなす。もう1つは政治的な機会構造のもう1つの側面である文化的スキーム、すなわち、その社会の政治文化や時代精神を反映し、集合行為の要求に対する社会一般の共鳴度に応じて、斬新性(novelty)やドラマ性をもつ抗議レパートリーとそうではないものが対をなす。この2つの軸を定式化すると、次のようになる。

抗議レパートリーの影響力(I) = 政治的資源の量(R) × フレームの共鳴度(F)

また、抗議レパートリーの影響力が重要な意味を持つのは、制度的資源量の多いときより、相対的に資源量が少ないときである。つまり、従来の制度的アクセスの機会が閉ざされ、制度資源の利用が制約されるとき、抗議レパートリー固有のインパクトが運動の成功を左右する。この場合、抗議レパートリーの影響力を定式化すると、次のようになる。

政治的機会構造と文化的フレーミングの統合モデルをめざして

抗議レポーターの影響力(I) = フレームの共鳴度(F) × 攪乱性の程度(D)

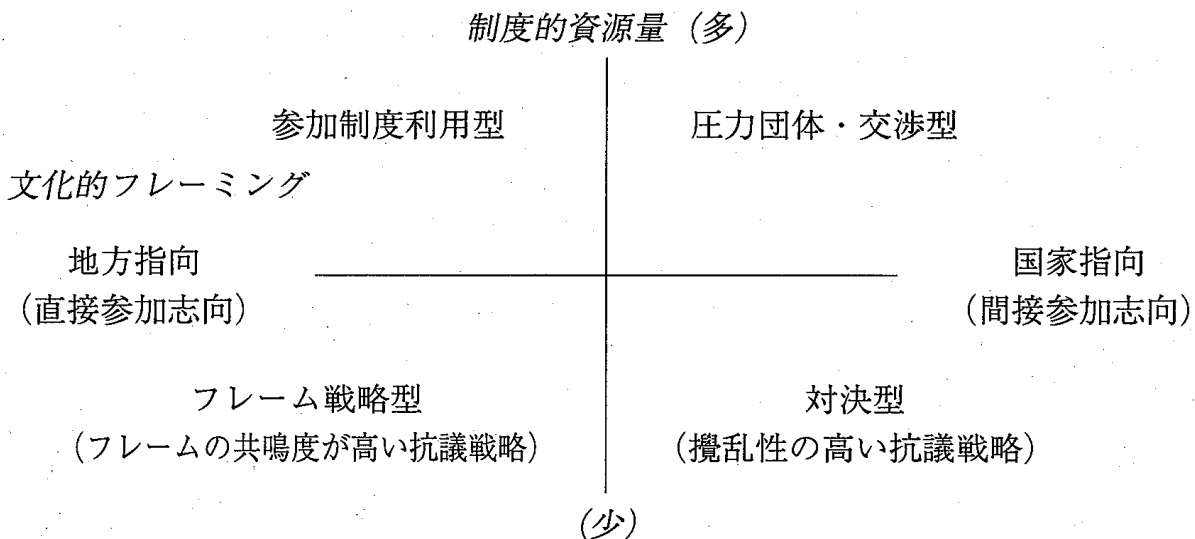


図2 政治的機会構造の配置に応じたもっとも有効な抗議戦略

4 現代日本の政治的機会構造と抗議レポーター

ここでは、上記で提示した「統合モデル」の分析枠組みを、戦後日本の住民運動の軌跡に応用し、分析枠組みの効能を試すとともに、実証分析のために概念的な操作化を行う。

従来、社会学における住民運動研究や行政学・政治学における地方政治研究は、(1)個別イシューをめぐるケーススタディが主体であり、(2)住民運動か地域権力構造（地方議員、地域リーダーや議会の役割）の一方に分析を限定し、その両者の間の「相互作用」を適切に分析してきたとはいえない。

すなわち、従来の住民運動研究においては、当該問題をめぐる住民運動の展開が詳細に記述・分析されている。その一方で、地域社会の権力構造（権力配置状況ないし利益媒介関係）とそれによって規定される運動の多様な行為形態・組織戦略の相違は比較分析されてこなかった。一方、地方政治研究では、地域の権力関係や地方議員の役割が分析の焦点とされてきたが、地域住民の要求提出や異議申し立てが地方政治に与える影響は十分分析されてこなかった。

これら従来の研究によっては、戦後50年間という長期的なタイムスパンで変化してきた住民にとっての「機会の歴史的推移＝マクロ動態把握」を分析することができない。また、こうしたマクロ動態分析は、1990年代に発生したさまざまな動き——ボランティア、薬害 AIDS 問題をめぐる世論の盛り上がりや運動、原発・基地・産廃問題をめぐる住民投票運動、NPO 法などの運動の制度化——これらがどのような機会の下で発生し展開するのか、また既存の機会構造をいかに変容させるのかを分析するためにも必要不可欠な作業であるといえよう。

以上の理論的検討を踏まえて、ここでは現代日本の政治的機会構造の歴史的変動と抗議レパトリを典型的に把握するとともに、両者の関係を試論的に検討する。地方における政治的機会構造の歴史的変化は、抗議レパトリにどのような影響を与えたのか、明らかにしたい。

4. 1 住民運動をめぐる政治的機会構造の類型化

まず、上記の政治的機会構造の類型にしたがって、戦後の地域社会における4つの機会構造の変化を「理念的に」想定することができる²¹。時代順に類型化すると、以下の通りになる。

(1) 伝統的クライエントリズム (1945～60年代初頭)

この時期には、代表制度への直接的なアクセスが困難であり、意思表出チャンネルも欠如している。同時に、「お上」意識と和のイデオロギーに代表される政治文化が、地方レベルでは強かった。中央の統制と地方の依存が全体の基調をなし、旧来型地域社会の秩序が強固で国家指向が強い。革新勢力も、国家指向が強く地方レベルを重視していなかった。そのため、国家レベルを標的とした社会運動には、ラディカルな形態のものも存在したし、杉本 (Sugimoto 1981) がいうように抗議件数も多かったが、地方指向の運動は弱かったといつてよい。

(2) 地域民主主義 (60年代半ば～70年代半ば)

地域民主主義という言葉は、60年代初頭に社会党の構造改革派から出されたものであるが、その後の高度経済成長をめぐる地方政治を体現するものと

なった。地方レベルにおいて保革対立が顕著になり、革新勢力が強かった都市部では中央地方の対立も生まれた。住民運動の全国的な噴出と革新自治体の簇生は、密接に絡み合う現象であり、戦後革新勢力の可能性をもっとも良質な形で示したといってもよい。革新自治体の増加により、各種の市民参加制度へのアクセスが容易になり、住民意識のレベルでは直接参加志向が強まった。

(3) ネオ・コーポラティズム (70年代後半～80年代後半)

革新自治体は75年を境として退潮に向かう。それに代わって出てきたのが、官僚出身で「行政のプロ」である首長に政党が相乗りする構図である。ここに至って、保革対立構図が融解し、それに代わって組織的な利益媒介システムが確立された。中央官僚出身の首長が、中央指向の財政再建政策をとることにより、国政レベルの優位性も高まる。同時に、政党や組合などの組織を通じた間接参加傾向が強まった。

(4) 疑似分権主義 (90年代～)

この時期には、55年体制の崩壊と脱イデオロギー化が決定的になる。その結果、一方では投票率の低下や無党派層の増加が示すように、既存の政治離れを示す。他方では、地方に対する国政の介入を嫌う傾向も高まる。すなわち、意識レベルでは自己決定の分権志向が強まるが、分権を可能にする制度的資源が欠如した状態になる。これにより、有権者には閉塞感があふれて、いわば「分権待望型閉塞状況」が到来する。

4. 2 住民運動の抗議レパートリーの類型化

以上みてきた政治的機会構造の変化は、さまざまな行為形態や組織戦略に影響を及ぼす。それでは、時期ごとの政治的機会構造に適合的な行為レパートリーはどのようなものか。簡単ではあるが対応関係をみていきたい。

(1) 一揆型 (または請願陳情型) : 伝統的クライエンタリズム (1945～60年代初頭)

「お上意識」が存在し、同時に制度的資源が欠如した名望家政治が、地方に

における政治的機会構造を形成する。この場合、目標達成のためには、既存の地域社会の秩序に対決的な「一揆型」がもっとも有効な抗議戦略である。しかし、一揆型の戦略をとるには多くの資源が必要であり、当時そうした資源は国家レベルの運動に向けられていた。結果的に、一揆型の戦略は少なく、「請願陳情型」の通念的な抗議レパートリーが一般的な抗議戦略となっている。

(2) 参加制度利用型：地域民主主義（60年代半ば～70年代半ば）

革新首長や革新政党の台頭により、参加制度の拡充が行われる。要求達成のためには、市民参加制度を通じての意思表示が有効な抗議戦略となる。

(3) 圧力団体・交渉型：ネオ・コーポラティズム（70年代後半～80年代後半）

組合や政党などの既存の利益媒介システムを通じての意思表示や利害交渉が、一般的な抗議形態となる。運動組織の政策受益団体化が進み、運動組織がそれ以外の抗議形態を媒介しにくくなる。

(4) 直接請求型：疑似分権主義（90年代～）

政策上の争点が、必ずしも特定の政党や候補者の選択と結びつかなくなる政治状況を前提とする。脱イデオロギー化現象により、各党派の政策上の類似性が高まる。さまざまな社会的争点がシングル・イシュー化し、個別政

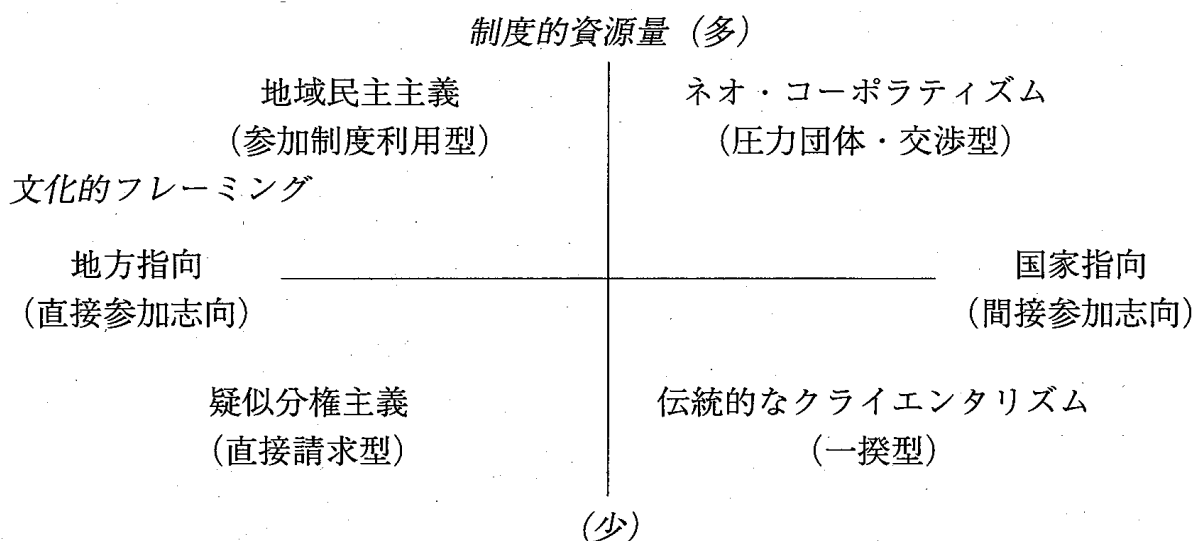


図3 戦後日本の地域の政治的機会構造と抗議レパートリー

策に対して直接意見を反映させにくい。これにより、リコールや住民投票などのように、シングル・イシューを扱った直接民主主義的な行為戦略が有効となる。

5 今後の課題

このような政治的機会構造の操作化は、日本の社会運動を分析するうえでいかなる有効性を発揮するのだろうか。これまでの作業は先行研究のレビュー中心で、まだ日本の現実には距離があることを自覚したうえで、今後の課題を提示しておきたい。

まず、政治的機会構造概念が生まれた欧米においても、これを分析概念として用いることは今後の課題とされている。そもそも、構造概念についての合意がとれていない段階で政治的機会構造という便利な用語が生まれれば、それが濫用されるのは当たり前なのかもしれない。ここで構造概念を制度的資源量と文化的フレーミングに分けて考えたことがどの程度の概念的・実証的明確化につながるのか、さらに議論を深めなければならない。

次に、政治的機会構造を操作的にうまく使うことができれば、従来のような社会学と政治学の乖離ないしたこつば化から、双方が交差する結節点を作り出すことができる。欧米で政治的機会構造概念を用いているのも社会学者と政治学者の双方であり、両方を媒介する領域として「争議の政治」「抗議の政治」といった用語が生まれていることは、このことを顕著に表している。日本では社会学者から政治的機会構造概念の導入が始まったわけだが、それを隣接諸科学との対話の道具として使う可能性も見据えた研究が必要になるだろう。

1 たとえば、『都市問題 特集・住民運動の現在』1996年10月号の2頁では、次のように述べられている。「90年代に入り、米軍基地問題や環境問題、原発問題等々についての社会運動が新たに注目を集めている。このような状況は、運動が1970年代の住民運動の興隆とその後の『退潮』の時代に続く、新たな段階に入ったものと考え

- てもよいだろう。90年代における社会運動は、運動の領域がリサイクルなどの多様な領域に広がりを見せているところや、旧来の保守－革新という政治的構図の枠に収斂されないことなどの点で新しさをもっている」。
- 2 成・角（1998）では、政治過程アプローチの包括的なレビューを行っており、本稿の2節はその一部を使用している。戦後日本における住民運動研究の枠組み整備のために我々が行ったものとして、本稿以外に樋口・中澤・水澤（1999）、中澤（1999）が、実証研究としては中澤他（1998）がある。
 - 3 政治的機会構造概念を住民運動研究に用いたものとして、角（2000）、山本・渡辺（2001）、山本（2002）がある。
 - 4 Skocpol 1979, Evans, Rueschemeyer and Skocpol 1985 を参照。また、近年のアメリカにおける国家論アプローチの隆盛については、真淵勝（1987）を参照されたい。なお、こうした流れは日本の政治学会で森脇俊雅（2000）や小野耕二（2001）などとして現れている。
 - 5 南米や東欧を中心とする権威主義体制の分析にも、政治的機会構造や抗議レパートリー概念が用いられるようになっている（Chiu and Lui 2000, Francisco 1995, Hipsher 1996, 1998, Sandoval 1998, Zdravomyslova 1996）。そうした研究のなかでもっともまとまった成果である Ekiert and Kubik(2001: 7)は、ポーランドの事例を通じた理論的関心として、民主化と社会運動研究の架橋を挙げている。バリントン・ムーアやスコッチポルの革命論と政治的機会構造概念には、共通点と相違点の双方があるが、権威主義体制下での社会運動研究にはどちらが適合的か、興味深い課題だろう。このような革命研究と社会運動研究の接合の必要性は、McAdam, Tilly and Tarrow(1996)でも主張されている。
 - 6 Tarrow(1994: 232)によると、政治的機会構造というアイディアの源泉は Tilly(1978)の第4章、The Opportunity to Act Together だと主張する。
 - 7 ここでの組織戦略とは、「運動形態」ともいえる。つまり「運動形態」を、政治的機会の性格におけるヴァリエーションに起因する従属変数の1つとして、運動をもっとも狭い意味での制度改革から革命に至るまでの連続体として考えるならば、政治的機会の次元と運動形態との一般的な関係は識別できる(McAdam 1996 a: 29)。Kitschelt (1986)がいうように、政治システムへアクセスが容易で政策決定の公開性が高い国家における運動は、同化戦略を採用し、確立された制度的ルール の範囲内で活動しようとする。なぜなら、確立された制度が政策形成や実行段階において複数のアクセス・ポイントを提供するからである。これに比べ、政策形成過程が閉鎖的な政治体における社会運動は、確立された意志表出の回路がないため、非制度的で対決的な戦略をとる。このように、運動の組織戦略と運動形態とは同じ対象の異なる側面に注目した場合であるといえる。
 - 8 Kriesi et al. は、①フォーマルな制度的構造、②特定の挑戦的行為に関連したインフォーマルな手続き、③特定の挑戦者に関する権力の配置関係を、政治的機会構造

として指摘している (1992: 220)。

- 9 Rucht は別稿で政治的機会構造を、①政党システムへのアクセス、②国家の政策実行能力、③挑戦者に関する同盟構造、④挑戦者に関する敵対構造として定義している (1996: 190-91)。
- 10 また、Tarrow は政治的機会構造の諸次元として、①政治体の開放性の程度、②政治的配置の安定度、③運動に好意的なエリート同盟の有無、④エリート内部の分裂を指摘している (1994: 85-89)。
- 11 こうした考え方は、Sewell(1992)にも共有されている。彼は Giddens の「構造の二重性」や Bourdieu の「ハビトゥス」の概念を批判的に検討し、構造とエージェンシーとの相互作用や構造の文化的背景を明らかにしている。
- 12 もちろん、Brand は文化的風土という概念は説明のためのアドホックなものであることを認め、より体系的な検討を試みている。その際、風土と運動のフレーミング戦略との相互作用に注目する。彼によると、1970年代は景気後退や成長に対するエコロジー的限界の認識が、人々の間にシンプルで自然的な生活様式への渴望を生み出すとともに、官僚主義や産業主義に対する広範な批判を生み出す悲観的なムードを作り出した (1990: 7)。これにより、運動の関心は、国家政策や政治的権力の配置から、生活の質や集合的アイデンティティの問題に移行した。また、他の論者(e.g. Hirschman 1982)と同様に、Brand はサイクルのパターンにしたがって文化的風土は変化するものとして把握している。ただ、彼が風土の重要性を主張するときは、それが政治的空間の開放/閉鎖に関連しているからである。しかし、彼も認めているように、社会的ムードや風土が、特定の動員やフレーミングのための努力と、どう関連するのかに関しては、まだ特定化されていない。
- 13 McAdam は、有利な政治的機会構造は社会運動のための構造的ポテンシャルを提供するが、それ自体が運動開始の十分条件ではないということを次のように主張している。「機会と行為とを媒介するのは人々であり、また彼らが状況に対して付与する主観的意味である」(1982: 48)。
- 14 「認知的プロセス」に関しては、Eyerman and Jamison (1991)を参照。
- 15 このことについては、近年おおむねコンセンサスが得られている。Johnston and Klandermans (1995)など参照。
- 16 フレームという概念自体は、ゴフマンのフレーム分析からの借用である。ミクロ動員の文脈でフレーム調整という概念を提唱したのは Snow らであるが(Snow et al. 1986)、社会運動のイデオロギー構築をめぐるフレームという用語を最初に使用したのは Gamson らである(Gamson, Fireman and Rytina 1982)。また、社会運動の意味構築や運動の文化形成をめぐる議論として、「フレーム調整」以外にも、「認知的解放」(McAdam 1982)、「合意の動員と行為の動員」(Klandermans 1984, 1988, 1992)、「イデオロギー的パッケージ」(Gamson 1988, Gamson and Modigliani 1989)、「集合的アイデンティティ」(Melucci 1989, 1996)などがあげられる。

- 17 この他に, Gamson は集合行為フレームを次の3つに分類する。第1に, 不公正(ある不必要な損害や苦痛を招く不公正さに対する道徳的な憤り等の感情的表現), 第2に, エージェント (集合行為を通じてある条件や政策を変革することが可能であるという意識として, 人々に「我々」を定義することによって力を付与し, 自分の歴史の潜在的なエージェントになるようにする), 第3に, アイデンティティ (異なる利害や価値を持つある「彼ら」に対して「我々」を定義するプロセス), の3つの要素を含意する。
- 18 この点に関して, 政治的機会構造とフレーミングの適合関係を典型的に整理し, イタリアの分析に用いたものとして, Diani(1996)がある。
- 19 同様の趣旨は上記の McAdam(1996 a)や Gamson and Meyer(1996)も指摘している。
- 20 Tilly のレパトリーという概念は, 競合的, 反作用的, 作用的という彼自身の集合行為の類型に対するオルタナティブとして提起されたものである。これは, 以前の類型の目的論的なインプリケーションを想定しない概念的特徴を持っている (1995 : 28)。
- 21 時期区分にあたっては, 佐藤 (1997) を参考に行っている。

引用文献

- Brand, K.-W. 1990 Cyclical Aspects of New Social Movements : Waves of Cultural Criticism and Mobilization Cycles of New Middle-class Radicalism, in R. Dalton and M. Kuechler eds., *Challenging the Political Order : New Social and Political Movements in Western Democracies*, London : Polity Press.
- Brockett, C. D. 1991 The Structure of Political Opportunities and Peasant Mobilization in Central America, *Comparative Politics* 23 : 253-274.
- 1993 A Protest-Cycle Resolution of the Repression/Popular-Protest Paradox, *Social Science History* 17 : 457-484.
- Chiu, S. W. K. and T. L. Lui eds. 2000 *The Dynamics of Social Movement in Hong Kong*, Hong Kong : Hong Kong University Press.
- Cooper, A. H. 1996 *Paradoxes of Peace : German Peace Movements since 1945*, Ann Arbor : The University of Michigan Press.
- Della Porta, D. and D. D. Rucht 1995 Left-Libertarian Movements in Context : A Comparison of Italy and West Germany, 1965-1990, in J. C. Jenkins and B. Klandermans eds., *The Politics of Social Protest : Comparative Perspectives on States and Social Movements*, London : UCL Press.
- Diani, M. 1996 Linking Mobilization Frames and Political Opportunities : Insights from Regional Populism in Italy, *American Sociological Review* 61 : 1053-1069.
- Duyvendak, J. W. 1995 *The Power of Politics : New Social Movements in France*, Boulder :

Westview Press.

Eisinger, P. K. 1973 The Conditions of Protest Behaviour in American Cities, *American Political Science Review* 67 : 11-28.

Ekiert, G. and J. Kubik 2001 *Rebellious Civil Society: Popular Protest and Democratic Consolidation in Poland, 1989-1993*, Ann Arbor : The University of Michigan Press.

Evans, P., D. Rueschemeyer and T. Skocpol eds. 1985 *Bringing the State Back in*, Cambridge : Cambridge University Press.

Eyerman, R. and A. Jamison 1991 *Social Movements: A Cognitive Approach*, London : Polity.

Francisco, R. A. 1995 The Relationship between Coercion and Protest, *Journal of Conflict Resolution* 39 : 263-282.

Gamson, W. 1990 *The Strategy of Social Protest*, second ed., Belmont : Wadworth.

——— 1988 Political Discourse and Collective Action, *International Social Movement Research* 1 : 219-247.

——— and A. Modigliani 1989 Media Discourse and Public Opinion on Nuclear Power, *American Journal of Sociology* 95 : 1-37.

——— and D. S. Meyer 1996 Framing Political Opportunity, in D. McAdam, J. D. McCarthy and M. N. Zald eds., *Comparative Perspectives on Social Movements: Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural Framings*, Cambridge : Cambridge University Press.

———, B. Fireman and S. Rytina 1982 *Encounters with Unjust Authority*, Homewood : The Dorsey Press.

樋口直人・中澤秀雄・水澤弘光 1999 「住民運動の組織戦略——政治的機会構造と誘因構造に注目して」『社会学評論』49巻4号.

Hipsher, P. L. 1996 Democratization and the Decline of Urban Social Movements in Chile and Spain, *Comparative Politics* 28 : 273-298.

——— 1998 Democratic Transitions as Protest Cycles: Social Movement Dynamics in Democratizing Latin America, in D. S. Meyer and S. Tarrow eds., *The Social Movement Society: Contentious Politics for a New Century*, Lanham : Rowman & Littlefield.

Hirschman, A. 1982 *Shifting Involvement: Private Interest and Public Action*, Princeton University Press. = 1988 杉田敦訳『失望と参画の現象学』法政大学出版会.

Jenkins, J. C. 1985 *The Politics of Insurgency*, New York : Columbia University Press.

——— and C. Perrow 1977 Insurgency of the Powerless: Farm Worker Movements (1946-1972), *American Sociological Review* 42 : 249-268.

——— and Schock, K. 1992 Global Structures and Political Processes in the Study of Domestic Political Conflict, *Annual Review of Sociology* 18 : 161-85.

——— and B. Klandermans 1995 The Politics of Social Protest, in J. C. Jenkins and B. Klandermans eds., *The Politics of Social Protest: Comparative Perspectives on States and*

- Social Movements*, London : UCL Press.
- and Wallace, M.1996 The Generalized Action Potential of Protest Movements : The New Class, Social Trends, and Political Exclusion Explanations, *Sociological Forum* 11 : 183-207.
- Johnston, H.1997 Editors Forward, *Mobilization* 2 : v-viii.
- and B. Klandermans eds.1995 *Social Movement and Culture*, London : UCL Press.
- Joppke, C.1993 *Mobilizing against Nuclear Energy*, Berkeley : University of California Press.
- 角一典 2000 「運動の成功／失敗と政治的機会構造——長野県東信地域における2つの住民運動の比較分析」『現代社会学研究』13号.
- Kitschelt, H.1986 Political Opportunity Structures and Political Protest : Anti-Nuclear Movements in Four Democracies, *British Journal of Political Science* 16 : 57-85.
- Klandermans, B.1984 Mobilization and Participation : Social-Psychological Expansions of Resource Mobilization Theory, *American Sociological Review* 49 : 583-600.
- 1988 The Formation and Mobilization of Consensus, *International Social Movement Research* 1 : 173-196.
- 1992 Social Construction of Protest and Multiorganizational Fields, in A. D. Morris and C. M. Mueller eds., *Frontiers in Social Movement Theory*, New Haven : Yale University Press.
- 1997 *The Social Psychology of Protest*, London : Blackwell.
- Koopmans, R 1993 The Dynamics of Protest Waves : West Germany, 1965 to 1989, *American Sociological Review* 58 : 637-658.
- 1995 *Democracy from Below : New Social Movements and the Political System in West Germany*, Boulder : Westview Press.
- Kriesi, H.1995 The Political Opportunity Structure of New Social Movements : Its Impact on Their Mobilization, in J. C. Jenkins and B. Klandermans eds., *The Politics of Social Protest : Comparative Perspectives on States and Social Movements*, London : UCL Press.
- 1996 The Organizational Structure of New Social Movements in a Political Context, in D. McAdam, J. D. McCarthy and M. N. Zald eds., *Comparative Perspectives on Social Movements : Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural Framings*, Cambridge : Cambridge University Press.
- et al.1992 New Social Movements and Political Opportunities in Western Europe, *European Journal of Political Research* 22 : 219-244.
- et al.1995 *New Social Movements in Western Europe : A Comparative Analysis*, London : UCL Press.
- Lipsky, M.1968 Protest as a Political Resource, *American Political Science Review* 62 : 1144-1158.

- 1970 *Protest in City Politics*, Chicago : Rand McNally.
- 真淵勝 1987「アメリカ政治学における『制度論』の復活」『思想』761号.
- 町村敬志 1989「現代都市におけるアクティビズムの所在——都市社会運動の新しい動向」矢澤修次郎・岩崎信彦編『都市社会運動の可能性』自治体研究社.
- 1994『「世界都市」東京の構造転換——都市リストラクチュアリングの社会学』東京大学出版会.
- McAdam, D. 1982 *Political Process and the Development of Black Insurgency, 1930-1970*, Chicago : University of Chicago Press.
- 1994 Culture and Social Movements, in E. Laraña, H. Johnston and J. R. Gusfield eds., *New Social Movements: From Ideology to Identity*, Philadelphia : Temple University Press.
- 1996 a Conceptual Origins, Current Problems, Future Directions, in D. McAdam, J. D. McCarthy and M. N. Zald eds., *Comparative Perspectives on Social Movements: Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural Framings*, Cambridge : Cambridge University Press.
- 1996 b The Framing Function of Movement Tactics : Strategic Dramaturgy in the American Civil Rights Movements, in D. McAdam, J. D. McCarthy and M. N. Zald eds., *Comparative Perspectives on Social Movements: Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural Framings*, Cambridge : Cambridge University Press.
- , S. Tarrow and C. Tilly 1996 To Map Contentious Politics, *Mobilization* 1 : 17-34.
- , S. Tarrow and C. Tilly 2001 *Dynamics of Contention*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Melucci, A. 1989 *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Societies*, London : Hutchinson Radius.
- 1996 *Challenging Codes: Collective Action in the Information Age*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Meyer, D. S. 1990 *A Winter of Discontent: The Nuclear Freeze and American Politics*, New York : Praeger.
- 1993 Institutionalizing Dissent : The United States Structure of Political Opportunity and the End of the Nuclear Freeze Movement, *Sociological Forum* 8 : 157-179.
- 宮本憲一 1996「環境問題と現代社会——維持可能な発展と日本の経験」井上俊他編『環境と生態系の社会学』岩波書店.
- 森脇俊雅 2000『集団・組織 社会科学の理論とモデル6』東京大学出版会.
- 中澤秀雄 1999「社会運動の『組織—機会』論と日本の住民運動——『政治過程アプローチ』の前提をどう考えるか」『ソシオロギス』23号.
- ・成元哲・樋口直人・角一典・水澤弘光 1998「環境運動における抗議サイクル形成の論理——構造的ストレインと政治的機会構造の比較分析（1968—82）」

『環境社会学研究』 4 号.

- Noonan, R. K. 1995 Women Against the State : Political Opportunities and Collective Action Frames in Chile's Transition to Democracy, *Sociological Forum* 10 : 81-111.
- 小野耕二 2001『比較政治 社会科学の理論とモデル11』東京大学出版会.
- Piven, F. F. and R. Cloward 1977 *Poor People's Movements : Why They Succeed, How They Fail*, New York : Vintage Books.
- Rucht, D. 1989 Environmental Movement Organizations in West Germany and France : Structure and Interorganizational Relations, *International Social Movement Research* 2 : 61-94.
- 1990 Campaigns, Skirmishes, and Battles : Anti-Nuclear Movements in the USA, France, and West Germany, *Industrial Crisis Quarterly* 4 : 193-222.
- 1996 The Impact of National Contexts on Social Movement Structures : A Cross-Movement and Cross-National Comparison, in D. McAdam, J. D. McCarthy and M. N. Zald eds., *Comparative Perspectives on Social Movements : Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural Framings*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Sandoval, S. A. M. 1998 Social Movements and Democratization : The Case of Brazil and the Latin Countries, in M. G. Giugni, D. McAdam and C. Tilly eds., *From Contention to Democracy*, Lanham : Rowman & Littlefield.
- 佐藤俊一 1997『戦後日本の地域政治 —— 終焉から新たな始まりへ』敬文堂.
- Schock, K. 1996 A Conjunctural Model of Political Conflict, *Journal of Conflict Resolution* 40 : 98-133.
- Sewell, W. 1992 A Theory of Structure : Duality, Agency, and Transformation, *American Journal of Sociology* 98 : 1-29.
- Skocpol, T. 1979 *States and Social Revolutions : A Comparative Analysis of France, Russia and China*, Princeton : Princeton University Press.
- Snow, D. and R. Benford 1992 Master Frames and the Cycles of Protest, in A. D. Morris and C. M. Mueller eds., *Frontiers in Social Movement Theory*, New Haven : Yale University Press.
- 1988 Ideology, Frame Resonance, and Participant Mobilization, *International Social Movement Research* 1 : 197-217.
- et al. 1986 Frame Alignment Process, Micromobilization, and Movement Participation, *American Sociological Review* 51 : 464-481.
- Sugimoto, Y. 1981 *Popular Disturbance in Postwar Japan*, Hong Kong : Asian Research Service.
- 成元哲・角一典 1998「政治的機会構造論の理論射程 —— 社会運動を取り巻く政治環境はどこまで操作化できるのか」『ソシオロギス』22号.
- Swidler, A. 1986 Culture in Action : Symbols and Strategies, *American Sociological Review*

51 : 273-286.

- Szabo, M. 1996 Repertoires of Contention in Post-Communist Protest Cultures : An East Central European Comparative Survey, *Social Research* 63 : 1155-82.
- Tarrow, S. 1988 National Politics and Collective Action : Recent Theory and Research in Western Europe and the United States, *Annual Review of Sociology* 14 : 421-440.
- 1989 a *Struggle, Politics, and Reform : Collective Action, Social Movements, and Cycles of Protest*, Western Societies Program Occasional Paper No.21, Center for International Studies, Cornell University.
- 1989 b *Democracy and Disorder : Protest and Politics in Italy, 1965-1975*, Oxford : Clarendon Press.
- 1994 *Power in Movement : Social Movements, Collective Action and Politics*, New York : Cambridge University Press.
- 1996 a States and Opportunities : The Political Structuring of Social Movements, in D. McAdam, J. D. McCarthy and M. N. Zald eds., *Comparative Perspectives on Social Movements : Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural Framings*, Cambridge : Cambridge University Press.
- 1996 b Social Movements in Contentious Politics : A Review Article, *American Political Science Review* 90 : 874-883.
- Taylor, V. 1996 Review : Repertoires and Cycles of Collective Action, *Contemporary Sociology* 25 : 485-487.
- Tilly, C. 1978 *From Mobilization to Revolution*, Reading : Addison-Wesley.
- 1979 Repertoires of Contention in America and Britain, 1750-1830, in M. N. Zald and J. D. McCarthy eds., *The Dynamics of Social Movements : Resource Mobilization, Social Control and Tactics*, Cambridge, MA : Winthrop.
- 1986 *The Contentious French : Four Centuries of Popular Struggle*, Cambridge, MA : Harvard University Press.
- 1993 Contentious Repertoires in Great Britain, 1758-1834, *Social Science History* 17 : 253-80.
- 1995 *Popular Contention in Great Britain, 1758-1834*, Cambridge, MA : Harvard University Press.
- Traugott, M. 1995 a Recurrent Patterns of Collective Action, in M. Traugott ed., *Repertoires and Cycles of Collective Action*, Durham : Duke University Press.
- 1995 b Barricades as Repertoire : Continuities and Discontinuities in the History of French Contention, in M. Traugott ed., *Repertoires and Cycles of Collective Action*, Durham : Duke University Press.
- 辻中豊 1988『利益集団』東京大学出版会.
- Wisler, D. and M. G. Giugni 1996 Social Movements and Institutional Selectivity, *Sociological*

Perspectives 39 : 85-109.

山本英弘 2002「社会運動戦術の規定要因——社会運動のイベント分析による探求」
『社会学研究』71号.

——・渡辺勉 2001「社会運動の動態と政治的機会構造——宮城県における社会
運動イベントの計量分析, 1986-1997」『社会学評論』52巻1号.

Zdravomyslova, E.1996 Opportunities and Framing in the Transition to Democracy : The Case
of Russia, in D. McAdam, J. D. McCarthy and M. N. Zald eds., *Comparative Perspectives
on Social Movements : Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural
Framings*, Cambridge : Cambridge University Press.

(付記)本稿は, 第70回日本社会学会大会(1997年)での報告を加筆修正したものであ
り, 筆者らに加えて, 井上治子, 道場親信の両氏との共同研究の成果である。ま
た, 本研究は住友財団による研究助成を受けている。記して感謝したい。

(そん・うおんちよる 中京大学社会学部講師 sungwonc@sass.chukyo-u.ac.jp)

(なかざわ・ひでお 札幌学院大学社会情報学部助教授 nakazawa@sgu.ac.jp)

(かど・かずのり 北海道教育大学教育学部旭川校助教授 kado@asa.hokkyodai.ac.jp)

(みずさわ・ひろみつ 新潟県頸城村総務課 mizusawa@lemon.plala.or.jp)

(ひぐち・なおと 徳島大学総合科学部講師 vyw 03403@nifty.ne.jp)

(2002年9月14日受理)